

「完全な者となりなさい」(マタイ5・48)

司教年頭書簡

一 三年の年頭にあたり溝部脩司教は恒例の年頭司教書簡を発表しました。「完全な者となりなさい」と題された書簡の要旨を以下にお知らせします。この書簡を基に各教会・各信徒の間で種々の話し合いをもたれることを望みます。

(要旨)

一 「神の民として」

(完全な者となりなさい)

教会は神の愛によつて集められた神の民の共同体である。

教会の中では意見の違いや趣向の違いがあつても、それをのりこえる神よりの力、聖霊を信じています。初代教会においても、絶えず不和や分裂がありました。が、それでも教会が長い世紀を生き抜き、発展してきたのは、イエスというお方によつてまとめられているからです。使徒的勧告『新千年紀の初めに』は、「キリストから出発する」ということを強調しています。神の民である教会は、何よりもキリストのことは、生き方を中心において、一致を目指して集います。そのために私たちは、まずみことばを深く味わい、祈りを深くすることから始めましょう。

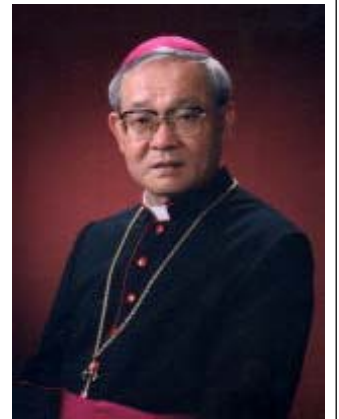
二 「聖徒の交わりとして」
(完全な者となりなさい)

教会は「聖徒の交わり」と表現され、教会の交わりは、「お互い聖人になる」ことを求める聖なる交わりです。私たちは皆完全になるように招かれているのですから、聖人になる道を歩むために、お互いに励まし合い、助け合うことが第一です。聖性への招きということが大切なのは、司祭の役割です。司祭はみことばを信徒に伝え、彼らを励まし、秘跡の執行を通して人々に神の愛・恵みを配り聖人への道へと導きます。

三 「奉仕する教会として」

(完全な者となりなさい)

キリスト者の最大かつ基本的奉仕とは、キリストの祭司職を果たすことです。信徒の祭司職とは、人々の思いを神に伝え、人々のために祈り、励ます役割があるということです。自分だけが救われるために教会に来るのではなく、人々のために祈り、悩み、苦しみを神に伝え、その癒しを求めるために教会に集ま



るのです。

四 「開かれた教会として」

(完全な者となりなさい)

教会が開かれた共同体になるためには、現代社会への深い洞察と理解が必須です。例を小教区にとつても、近隣の小教区とのつながりをますます緊密にする必要があります。自分の小教区だけが良ければそれで良いということではありません。

共同体の一致、発展のためには、相手を受け入れ、よりよき善を求める姿勢が必要です。司教と司祭、司祭同士、司祭と信徒の対話のもとに、暖かい教会が生まれ、教会は神に喜びと感謝の賛美を捧げる場所となります。

全文は、教区のホームページ <http://www.sendai.catholic.jp/> より読むことができます

司教年頭書簡を読んで

元寺小路教会 千葉智行

今年の年頭司教書簡「完全な者となりなさい」は、昨年「信仰共同体を育成する」と深く関

連があると感じました。

就任後教区を一巡された司教様は、司祭と修道者の高齢化を実感され、昨年の書簡で信仰共同体から必ず後継者が育つことを述べられ、四つの指針をあげられました。

みことばの分かち合い。

弱い人を大切にする暖かい

教会。

神様からの役割を知り奉仕

する。

キリストの祭司職を行使す

る。

この書簡は仙台教区のビジョンと受け止めることができます。

今年の「完全な者となりなさい」はマタイ福音書の山上の垂訓からで、私たちは神様から愛され、集められた民であり、何より聖人になる道を歩む信徒の集まりであること。これは道徳的に完璧な者になるのではなく、神様のみ旨を喜んで生きることだと話されています。次いで昨年と同じ「キリストの祭司職の行使」では、更に詳しく後日話すとされています。

最後に最大課題として、「現代社会に開かれた教会」について小教区で真剣に考えてほしいと結ばれています。

昨年は共同体の目標を、今年「信仰者の生きる道を示されま

二つの書簡が実行されることに、宣教推進の共同体が生まれてくるものと受け止めました。

司教年頭書簡について

東仙台教会 阿部正子

一月五日、婦人会例会で昨年

に引き続き、溝部司教様の年頭

書簡を読み合いました。信徒、

小教区、そして仙台教区への司

教様の愛のメッセージと導き

によるこびを感じ、今年も私た

ち一人ひとりが信仰者として新

たな気持ちで、神様のお望みは

何かを共に考えながらことばに

聴き入りました。

それでも私たちは迷える小羊、

事ある毎に書簡を拝読しては、

自分を振り返り神様へ心を向け

直し、祈りと分かち合いで温か

い教会づくりを目指して、希望

のうちにまた一歩と進んでおり

ます。神に感謝。

訃報

シスター

エリザベット

俵谷 昌子

(享年七十五歳)

二〇〇三年一月二十

三日 帰天

郡山ザベリオ学園中等学校にて

宗教を担当、コングレガシオン・ド

ノートルダム花園町修道院



司牧評議会報告

第一回「司教区活性化のための研修会」開催

二月十六日(日)のカトリック仙台司教区センターでの宮城県「主日の集会祭儀司式者及び聖体奉仕者研修会」を皮切りに、「司教区活性化のための研修会」が各県で開催される。

この研修会は、昨年九月開催された司牧評議会定例会議の「仙台教区における緊急課題」に関する話し合いを踏まえて、司牧評議会準備を進めてきたもの。今回の第一回研修会は、司祭不在の主日の集会祭儀司式者及び聖体奉仕者研修」とし、参加者が「各地域での体験・課題を持ち寄ることを通して司教区の今後の課題を見定め、また、分かち合いを通して奉仕者としての連帯を深めること」を目指している。

今後、二月二十三日(日)に岩手カトリックセンター(四ツ家教会)で、三月十六日(日)に青森本町教会で予定されている。なお、福島県での研修会は

五月十八日(日)、カトリック郡山教会において開催する予定。

第二回司牧評議会定例会議開催予定

本年三月二十一日(金・春分の日)に第三回司牧評議会定例会議がカトリック仙台司教区センターで開かれる。主な議案は、

第一回「司教区活性化のための研修会」を実施しての評価、
司教区人権福祉委員会解散に関する件、の二案。

特に、第二議案では一九九一年三月二十一日の司牧評議会定例会議で立ち上げられた「教区人権福祉委員会」の歩みとその活動を制約した種々の問題点について振り返りながら、教区人権福祉委員会を解散することの是非について審議される。

司祭評議会報告

二〇〇三年二月二十四日(月)県別の司祭の集いが予定されている。

話し合いのテーマは、

意見集約

近隣司祭間の司牧協力の

建築進む 司教館

十二月七日(土)司教館の上棟式が行なわれてから約二ヵ月、工事現場を訪れてみた。

月設計の高田洋文氏に現場を案内していただき、お話を伺ったが、あちらこちらに設計者のこだわりが見られ、そのご苦労



は察するにあまりあるものがあった。

外壁はすべて板が張られ、塗装を待つのみ。内装は、床、壁の貼り付け工事が進行していた。居住性の快適さはもちろん、室内の空気の流れ、採光等に気を配りながら、使われる材料、接着剤、塗料などはすべて天然素材を用い健康にも環境にも行き届いた配慮がなされている。

建物の中心にある八角形の小聖堂には、長崎から運ばれて来たステンドグラスがはめ込まれ、

美しい光がまだ足場の組まれた空間を照らしていた。工事は四月いっぱいをめどに着々と進められている。(岩井)

故佐藤千敬司教追悼ミサ

昨年十一月十二日神のもとに召された佐藤司教様の追悼ミサが聖ドミニコ会主催で二月十一日(火・建国記念の日)午後一時からカトリック北仙台教会で行われた。

冷たい雨の降る日だったが百名余の信徒が参列した。



ミサの後、遺影を囲み「サルベリジナ」を歌うドミニコ会司祭たち

それぞれの五十周年

釜石教会・本町教会・大籠教会

岩手県・釜石教会（昨年十一月三日）、青森県・本町教会（同十一月一日）、岩手県・大籠教会（同十二月二十一日）と、仙台教区の各地で創立又は献堂五十周年を迎えている。前号では、青森本町教会の献堂五十周年の記事を掲載しましたが、今回は、大籠教会献堂五十周年の記事を掲載いたします。

また、釜石教会五十周年については、次ページの『各地から』で紹介いたします。

岩手・大籠教会（米川の巡回教会）献堂五十周年記念式

昨年十二月二十一日に献堂五十周年を祝いました。

溝部司教様をお迎えして記念ミサ、その後、大籠キリシタン殉教公園の隣にある、大籠伝習館にて、司教様の東北キリシタン殉教に関する講演会、【写真】

続いて祝賀会が行われた。地元の方々も大勢参加し、盛大に祝うことができました。

大籠教会は、岩手県の宣教を担当しているベトレム外国宣教会によって昭和二十七年に建立されました。昭和四十年からは米川教会の巡回教会となりました。

大籠地区には、数多くの殉教地があり、町で「殉教公園」をつくり、資料館やクルス館（舟越保武氏の彫刻・十字架像が安置されている）があり、遊歩道には、十字架の道行きが設置さ

れています。

この五十周年を記念して、大籠教会聖堂前に立派な案内板を



大籠キリシタン保存会の皆様によつて設置されました。教会の庭は、庭木を植えて公園にする予定です。

米川地区もキリシタン殉教の地ですので、殉教祈念碑を建立する予定で準備を進めています。

カテドラル

皆様のお祈りと献金をよろしくお願いたします。

なお、五十周年記念誌を発行し、教会、修道院にお贈りいたしました。（高橋）

聖堂（カテドラル）として、司教座の式典や、仙台教区での公式行事が多い。また、非公式でも小教区や県をまたいでの催事も行なわれています。この催しに目を向け、ご紹介するのがこの、『カテドラル』欄です。

団のコーラスが流れ、光の祭儀に入りました。『...ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる...（イザヤ九・一〜六）と朗読され、復活のローソクと共に入堂された光の子らにより、五〇〇余名の参列者のローソクに救い主、キリストを表すシンボルの火が灯されました。

溝部司教さまは説教の中で、「クリスマスはメルヘンではない。しかし、メルヘンである。クリスマスは、メッセージを蓄えたメルヘンである。」と自作詩を朗読し、クリスマスが告げるメッセージについて熱くのべられました（詳細は教区のホームページへ）

また、閉祭のあいさつでは、「クリスマスは家族の団欒と心安らぎ、平和とかが象徴されています。皆さんのご家庭の中で、少し争いがあったり、仲違いなどあったら今日のミサにあずかり、良い機会ですから自分の家庭を何よりも大事にする...との決意を持って帰られると良いでしょう」と奨めのこ

ミサ後、コーヒー、紅茶が用意された信徒ホールで、ご降誕の喜びを分かち合いながら、また、地上に住む全ての人々に向けられた喜びのメッセージに心を向け、平和の大切さを味わい、私達が地球家族として、兄弟姉妹として愛し合うことを再確認しながら帰路につきました。

なお、夜十一時の徹夜ミサと、二十五日の日中ご降誕ミサにも合わせて八〇〇余名の信徒が参列し主のご降誕を祝いました。（元寺小路教会・広報部）

一般市民と共に祝うカテドラルのクリスマスミサ

一般市民と共に祝う主のご降誕のミサが、去る十二月二十四日（火）午後七時よりカテドラル（元寺小路教会）にて喜びと感謝の内に行われました。

ミサが始まる十五分前、オルガン演奏をバックに先唱者が、『初めに、ことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。ことばは肉となって、私たちの間に宿られた。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる、独り子である神、この方が神を示されたのである。』（ヨハネ福音書より）を朗読すると、仙台少女合唱

「クリスマスはメルヘンではない。しかし、メルヘンである。クリスマスは、メッセージを蓄えたメルヘンである。」と自作詩を朗読し、クリスマスが告げるメッセージについて熱くのべられました（詳細は教区のホームページへ）

また、閉祭のあいさつでは、「クリスマスは家族の団欒と心安らぎ、平和とかが象徴されています。皆さんのご家庭の中で、少し争いがあったり、仲違いなどあったら今日のミサにあずかり、良い機会ですから自分の家庭を何よりも大事にする



キャンドルサーピスの準備をする子供たち

各地から

青森 三沢教会

堅信式

二〇〇二年も押し迫った十一月二日(日)溝部司教様をお招きし、聖堂いっぱい信者を満たしてミサが行われました。三沢教会に司教様が訪問されるのはずいぶん久しぶりでした。私たちにとって二〇〇二年のクリスマスはそういう意味で二重の喜びでした。



司教様は説教の中で、「こうして私が手をかざすと聖霊で満たされます。聖霊が部屋の中いっぱいになるのです。」とおっしゃり、信仰に目覚めるものにとつてのみわかる不思議な業を明快に説明され、そして堅信の秘跡を授けられました。代父とし

てその場に臨んだものの一人として「大きな力強さ」を感じたものでした。堅信を授かった人たちはフランス人の子も三人を含めて七人でした。

北の地から雄々しく羽ばたいてゆくことでしょう。(内山)

岩手 釜石教会

釜石教会五十年の歩み
去る十一月三日、かつて経験

したことのない百二十人ものカトリック信者が聖堂を満たしていました。

当日の祝賀会は盛況で、クリスマスの時よりも、岩手県のブロック交流会よりも多くの方々が参加していただきました。釜石教会に縁のある方々、県中央ブロックの方々が、会を盛り上げてくださいました。



また当日、「カトリック釜石教会五十周年記念誌」を皆様に配布することができました。

今まで、釜石教会のために尽力してくださった多くの方々、当日参加くださった方々、そして何よりも神様に感謝しつつ、新たな五十年への出発を迎えました。(小野寺)

宮城 築館教会
右人差し指一本の伴奏で入祭の歌。神父様の声だけが聖堂一杯に響くミサが始まった。

今日も七名出席のミサ。全員が先唱、第一・第二朗読、共同祈願、奉納などの役割を分担し充実したミサであった。

平均年齢七十代に近い教会は週二回のミサ(水曜日の夕方もあり)にあずかり、自分自身の信仰を見つめるのに精一杯の日々を送っている現状である。過去四年間司祭不在の時代があり、信徒会長を中心に全てが信徒の責任において解決しなければならなかったことを思うとき、田舎の小教区の在り方と将来に、少なからず慄然とするものを感じたことだった。

現在、司祭館の一部の改装が進められているが、信徒の負担はほとんど無に等しく、教区と神父様の厚意に甘える実態に

ささか無力感だけが交錯するのである。

ようやく取り戻した本来の姿から、再度主任司祭が四教会兼務になる。「神父よ、いずこに行きたもう」。年一度の幼稚園の父母の協力を頼りのバザー【写真】に生き甲斐を感じる現在の教会の在り方に、築館教会の全てがあるのかも知れない。(鈴木)

福島 郡山教会



二〇〇二年の郡山教会では教会学校・福祉 奉仕活動などに多くの信徒の努力があつて実り豊かな一年間でした。

これらを支えたのは大きな祈りに包まれた秘跡の典礼や盛んな聖書朗読会でした。長い準備の歩みを終えて、四旬節から復活祭の恵みに溢れる主の過ぎ越の典礼に力づけられて



十名の受洗者が誕生しました。

六月九日に初めて溝部司教様をお迎えして、堅信の恵みによつて四十一名が信者としての「成人式」を祝いました。【写真】

これらのお祝いの準備を支えた神の愛に溢れる聖霊の力を皆で経験することできたことを感謝いたします。

日本の教会では聖書百週間が盛んに行われていますが、郡山では季節の休みを十分に取つたうえで、旧約八十回・新約六十回を四年間に修めます。二十三年以上たつても参加者はよく集まります。今ではプロテスタント九名、未信者十二名が仲良く参加しています。(勇鐸(ガリエピ)神父)

聖体奉仕者任命式

二〇〇三年は、仙台中央地区聖体奉仕者の交代の年（任期二年）。各教会から推薦された新聖体奉仕者は、昨年から講習を受け準備されてきました。任命式は、一月五日の元寺小路教会を皮切りに、順次各教会で行われ、司教様よりそれぞれ任命され、新聖体奉仕者計四十一名が誕生しました。

一月十九日は、東仙台教会の聖体奉仕者任命式、当日は冬晴れ。溝部司教様をお迎えし、多数の信徒が参列。司教様は説教で「聖体奉仕者は儀式をするのではない。聖体を配るだけでも

ない。まず自らひざまずいて祈ること、その日の典礼、福音を深く読み取ることが大切です。このような心から聖体を授け、その聖体とそしてあなたの霊的感性を皆さんに伝えることで」と述べられた。

新聖体奉仕者の氏家昭さんは「大変緊張しました。お話を聞き、主人に仕える僕の話の思い浮かべています。司教様のお言葉を深く心に刻み、今後務めていきます」と語られた。

【新聖体奉仕者は次の方々です】（敬称略）

（元寺小路教会）土井澄二・今田潔・橋本亮二・佐藤祐利・伊

私の気分転換

教区事務所 鷹嶺達衛神父
A 神父「あつかれた。病院にでも入院して、しばらく休みたいなあ」

B 神父「なめつ！ 入院したつて、実際は色々縛られ、休むどころか一日も早く退院したいと思うようになるよ」
A 神父「へえ。じゃどうすればいいんだ？」

B 神父「それは自分で考えな

きや。だけど『愛には苦しみが伴う。しかもその愛が本物なら、そのための苦しみをさえも愛されるようになる』と言ったのは聖アウグスチーノじゃなかったかね」

A 神父「そうか。好きなことをやるときには、疲れなど気にしないし、むしろ辛さそのものが楽しみになる。なるほどそれが気分転換の秘訣というわけか。よしっ！ではうんとお金をためてうまいものを食ってやるうー！」

B 神父「????????????????????」

活動紹介

夜回り・炊き出し（正平協）

おとしの十月から、路上生活（ホームレス）の方々に対し、炊き出し（食事提供）と夜廻り（寝どころ訪問）を月一回ずつ行っております。一月二日には公園で餅つきをし、【写真】いっしょにお正月を迎えることができました。悪人にも善人にも太陽を照らせ、雨を降らせてくださる神様は、家のない人にも新年の太陽を昇らせてくださいました。私たちの活動は、多くの人の祈り、献金、献品によって支えられています。ありがとうございます。

- 藤佳文・小野武・松永徹平・韓成洙（ハンソンズ）・園部真知子・氏家あきこ・千葉レイ子・斉藤琉子・水間裕子・佐藤洋子・小林テイ子・奥山扶美枝・松永淳子・高橋広子・斉藤美喜子・沼倉久枝・大場光子
- （一本杉教会）岩井誠・成毛一雄・小野寛子・大友愛子
- （八木山教会）岡田謙一・野田和雄・半沢えい子・竹内淑子
- （東仙台教会）氏家昭・梅津進・渡辺驥一郎・阿部圭子・阿部正子・薄井慈恵子
- （豊屋丁教会）叶昌弘・原尚幸・小貫トシ子
- （西仙台教会）上野隆・松坂愛子・筒井博子



ございます。ものをあげるだけでなく、皆様の心、神様の心を伝えることができるように心して活動していきたいと思っておりますので、どうぞこれからもよろしくご支援お願いします。（福島）

修道院紹介

コングレガシオン・ド・ノートルダム 野田町修道院

一九三二年に仙台教区の招きを受け、カナダから派遣されて、福島市に日本で最初の修道院が創立されてから、きょうまでに東京（調布市）と北九州市（戸畑区）に支部が設けられ、学校を併設して教育を主なる活動としています。

野田町修道院は、花園町修道

院と共に幼稚園から短大生まで一八〇〇名の教育にたずさわっています。

創立者聖マルグリット・プー ルジョワは開拓時代の北米で子女の教育を事業とし、聖母マリアのご訪問の精神に倣って、必要とされるところどこでも宣教者として働きました。現在ノートルダム修道会は、アメリカ合衆国や南米だけでなく創立者の母国フランスやアフリカにも支部をもって活動しています。

日本でも創立者の精神を生き、望まれるところで、学校教育や信仰教育のために献身しています。

現代の不安定な世情にあつて青少年を育てること、特に心の育成には大きな困難を伴います。が、神に信頼を置き、祈りながら宣教者としての使命を果たそうと努めています。（世界アイ子）

俳句

《俳句》
たけぼつきせわ
竹箒 忙しく使い



暮れ早し
物干しに大漁旗も冬麗

谷底の冬菜青々真昼の口

岡崎 喜代子